

四万十市ふるさと応援団員からの便り

四万十の 川、海、山の自然力



佐藤 忠
横浜市在住
昭和20年生まれ

関東幡多四万十会による「四万十川、黒潮町などを巡る幡多路ツアー」を関東から15名が参加して、5月24日ー26日の日程で四万十を訪れた。各地を巡るなか、四万十・幡多の川、海、山の美しさと自然の豊かさに驚かされた。

四万十川でホタルを鑑賞した。三里の「四万十の碧」で船に乗り、上流を目指した。夕方まだ薄明るいうちは、源氏ホタルも一つ、二つと数少ない。屋形船で弁当を食べ終え、沈下橋の下をくぐりながら、十分暗くなったころ、川岸の岸壁、覆いかぶさった樹々をバックにホタルの数は一段と増えた。「きれい、すごい」という声が飛び交った。ホタルの光が川面に映って、いろいろな軌跡を描いている。川辺には百匹以上のホタルが飛び交っている。子どもどころ、小川でみたホタルの数とはスケールが違う。ホタルが乱舞している様子はずっと続いた。四万十川にどれほどのホタルが成育しているか図りしれない。一晩で3千匹は見たか。

黒潮町の大方ホエールウォッチングに

出掛けた。入野漁港でスタッフのさちゃんから説明があり、ニタリクジラ、マイルカ、ハナゴンドウ、ハンドウイルカが見えるとのこと。8時30分に港を出て、すぐにマイルカの群れに出会った。100〜200頭が船の周りを泳いでいる。10分ぐらいい一緒に泳いでいた。鰯の群れが見えるとスピードを上げて、向かっていったようだ。

船は、クジラを探して沖合に進んだ。なかなかクジラに出会えない。帰る頃になって、船先の展望台にいた山根さんが、「いた」と声を発した。1〜2分して、また「見えた」と別の声。ハナゴンドウの背びれが皆にも見えた。3頭いたか。最後に、体に白い傷がついたハナゴンドウの全身が見えた時は、歓声が上がった。でも、ニタリクジラは見逃した。この広い海でクジラを見つけることは難しい。高知湾の沖合20〜30kmまでクルージングして、広い海の上で見て、感じたことは初めての経験であり、うれしかった。

四万十川の上流にある「海洋堂ホビー館四万十」をめざして、マイクロバスの旅がはじまった。佐田の沈下橋、勝間沈下橋を歩いて散策した。河原に降りてみると、丸い小さな石が一面に広がっている。土のあるところは見つからなかった。石の川原は、上流に行っても続いていた。

四万十の大自然の中に入ってみると、普段気づかない驚きと発見ができたことは幸せで、自然から学ぶ旅となった。